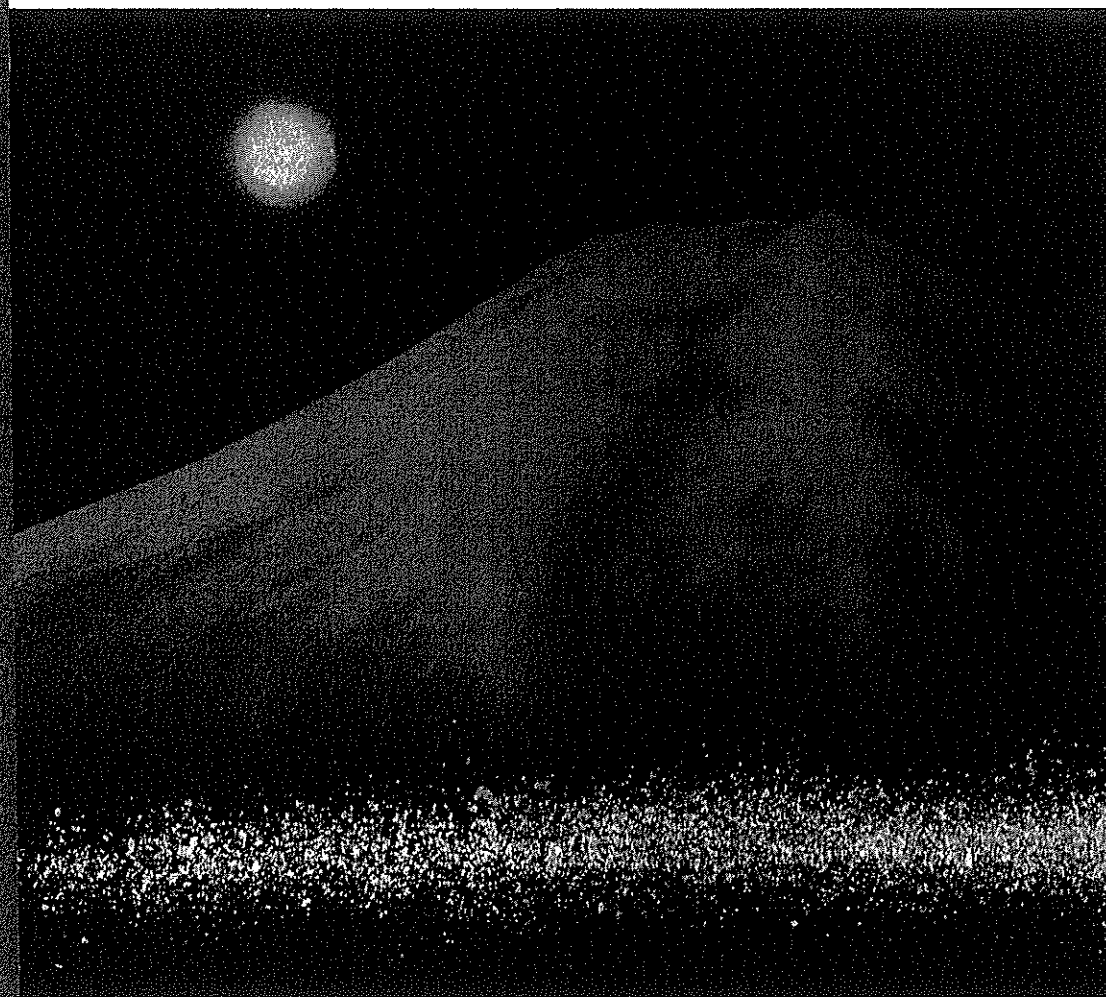


# 文藝春秋

大正十二年一月三十日第三種郵便物認可  
創刊元年十月一日発行(毎月一回一日発行)  
第九十七号第十卷九月十日発行

総力特集 **日韓断絶** 藤原正彦  
佐藤優

特別寄稿 村上春樹「至るところにある妄想」/ 特集 **がん医療の新常識** 十月号



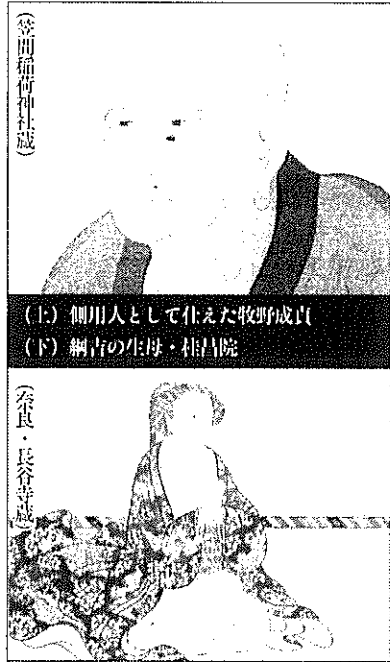
# 将軍の世紀

やまうち まさゆき  
山内昌之

武威野大学特任教授・  
東京大学名誉教授

## 【第二回】制約されない権力者

儒学の理想に基づき仁政を願った五代将軍・綱吉は、  
「新官僚集団」を作ることと権力を掌握した。



（登壇権侍社蔵）

（奈良・長谷寺蔵）

### 一、聡明な潔癖症

「然れども天下を治させ給ふべき御器量なし。此君天下のあるじとならせ給ハ、諸人困窮<sup>つみかき</sup>、仕、悪逆の御事つもり、天下騒動の事もあるべし。しからば権現様「徳川家康」御精魂をつくされ取しづめられし天下、騒動の事あらば、御先祖御家へ対し不忠不義のわざなり」（戸田茂暉『御当代記』延宝八年二月廿七日条）。

これは、延宝八年（一六八〇）に死んだ四代将軍・家綱の後継者・綱吉について囁かれた言葉である。家綱には、甲府藩主で桜田御殿に住んだ綱重と、館林藩主にして神田御殿に居住する綱吉の二人の弟がいた。綱重は先に死んでいたのに、次期将軍が綱吉にすんなり決まらなかった所にも、嫡系で継承されてきた將軍職が傍系に移る重みが反映されている。『徳川実紀』は、源頼朝の家系が三代で絶えた後に京都から九条家や宮家を迎えた故事にならぬ、酒井忠清などが有栖川宮幸仁親王を迎える案を検討したと記述する。実際に、大典に家綱の胤を宿したと噂される女中がおり、万一男子誕生となっても、宮将軍であれば「若君にて渡らせ給はゞ、京都へ御返し申す事は、古来其例多し」と囁かれた『武野燭談』巻之

二十）。これを制して綱吉を後継に推したのは、前年七月に老中になった堀田筑前守正俊である。綱吉が將軍になると「筑前守を忠臣とおぼしめし、段々御取立といふ」（『御当代記』一）。正俊は、綱吉が將軍になる前は四位下侍従・安中四万石だったのに、襲職後には下総古河九万石となり、やがて少將に進みすべて十三万石を領した（『寛政重修諸家譜』巻第六百四十五）。

宮將軍の真偽は疑わしいにせよ、この種の風説が飛ぶのは、綱吉の資質に危惧を感じさせる要素があったからだ。この欠点を誰よりも早く見抜いたのは、父の家光である。家光は幼名徳松こと綱吉の賢さを衆に勝るとしながら、才名のために生涯の禍を自ら引き出しかねないと綱吉の母・玉（後の桂昌院）に警告した。兄たちに礼を失して憎しみを受けてはならず、何事も謙遜をむねに輔導すべし、というのだ。書を学ばせ聖賢の道に心をいたすようにと説いた（『常憲院殿御実紀』巻一）。綱吉は歴代將軍でおそらく一番の学識を誇り、古代中国の堯・舜や孔子など聖賢の教えを現実政治に生かす理想主義者になろうとした。側用人・柳沢吉保は、「聖人ノ道ヲ尊崇マシマシ」<sup>（一）</sup>「御病中ニテモ聖経ヲ御覽アラザル日ナシ」と褒め称えている。六歳で父家光を失ったために、母への孝養は尋常でなく、普段は三の丸にいる桂昌院が本丸

に来ると自ら飲食の配膳まではからい、毎日使者を派遣して御機嫌うかがいをした（『常憲院贈大相国公実紀』巻三十、以下『憲廟実録』と記す）。公私の空間を統一して礼的秩序の理想を実現しようとする綱吉からすれば、親への孝なくして君への忠はありえず、社会をすべる人道としての仁の始まりもなかった。しかし、大名や旗本を含めて並の武家は、綱吉のように聖賢の道を朝夕いつも意識できるものではない。綱吉を大樹（將軍）にふさわしいと考えた大名はどれほどいたのだろうか。

綱吉は、全国に君臨する唯一無比の武家支配者という自負が強かった。譜代外様の差を問わず、すべての大名に対し最高権力者として統治責任を担おうとしたのだ。酒井忠清のような門閥譜代の重みさえ弱めている。徳川時代が進むと社会経済面でも大変貌を遂げたのに、支配階級の武士は旧態依然たる感覚や生活様式のままだった。綱吉は、仁にもとる行為は、人間の本来にそむくと信じていた。今や武士は刀でなく、温和な役人として政治で仁を弘めるべきなのだ。

綱吉の穢れを嫌う潔癖さへのこだわりも無視できない。外様大名（八戸二万石）ながら南部直政は、柳沢吉保と一緒に側用人に登用されたのに、一年ほどで御役御免となった。直政の手に小さな瘡<sup>かさ</sup>ができたので「御きよ